2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**動物と人間の共生を語り直すナラティヴ** **ージャン＝クリストフ・バイイとジル・アイヨーを中心にー**
キーワード	①動物と人間、②人間中心主義批判、③動物の主体性を描く

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	ミヤワキ　エリ 宮脇　永吏
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	桃山学院大学国際教養学部・講師
現在の所属先・職位等	同上
プロフィール	2015 年パリ-ソルボンヌ第 4 大学博士後期課程フランス文学専攻を修了後、日本学術振興会特別研究員 PD、甲南女子大学国際学部特任講師を経て、2022 年より現職。パリ大学の博士論文ではアイルランド人作家サミュエル・ベケットを対象とし、人間の存在と視覚についての哲学が作家の作品世界に与えた影響を論じた。近代的人間観の反省と非西欧世界の文化が文学を含めた芸術表現をどのように変化させてきたかに関心がある。

1. 研究の概要

本研究は、現代社会を生きる人間と動物との共生を考えるための新しいナラティヴのあり方を解明するものである。そのために、本研究は動物と人間との関係について論じる言説と、動物を描くイメージを比較・分析する手法をとる。主な分析対象は、動物と人間について思考し続けてきたフランスの思想家ジャン＝クリストフ・バイイ（Jean-Christophe Bailly, 1949-）の詩的・思想的エッセイと、バイイの動物論の着想源となるフランスの画家ジル・アイヨー（Gilles Aillaud, 1928-2005）の一連の動物画とした。

その特性を同定するためには、これまでのフランス内外の文学・芸術作品に見られる動物と人間の関わりを描いた作品群や思想の変遷を理解することが必須である。2025 年度の研究時間の多くは、分析するための基礎研究を進めることになった。本研究のフィールドであるフランスの文学や芸術作品群での動物の描かれ方について把握するだけでなく、現代日本において盛んに議論されるようになった動物と人間との物理的・心理的距離の問題、文化人類学において文化・自然を二分化しない先住民族たちの動物観を再考する近年の潮流も、本研究課題を進めるにあたり重要な参照項となった。

2. 研究の動機、目的

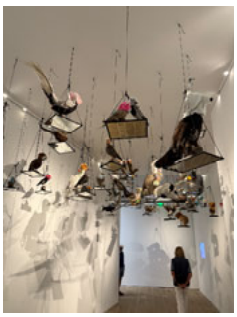
本研究の目的は、現代社会を生きる人間と動物との共生を考えるための新しいナラティヴのあり方を解明することである。2000 年以降の人文科学研究の動向として、環境への関心が高まっているが（『環世界の人文学』2021 年など）、本研究では環境を考える上で「動

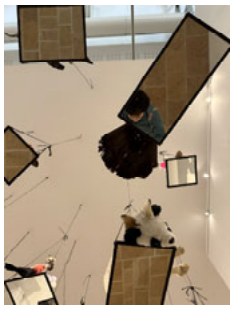
物」というテーマ系をあらためて掘り下げる必要性があると考えた。なぜなら人間の営みと動物の世界は相互に絡み合いながら、環境に直接的な影響を及ぼしてきたからである。しかし、ただ動物を語れば良いわけではない。従来の人間中心主義的な観点からではなく、動物ひいては環境そのものの語られ方を根本的に見直すことが要請されている。こうした「別の／他者のナラティヴ」（ヴァンシアーヌ・デプレ）の必要性を訴えるフランス語圏の哲学者らは、2010 年代に動物論を相次いで上梓したフランスの思想家・詩人ジャン＝クリストフ・バイイ（Jean-Christophe Bailly, 1949-）の言葉を出発点に据えていた。そこで、本研究はバイイの作品に立ち戻り、その語りの特性を検討することにした。

しかし、バイイの動物論の原点にあるのは、1980 年代に共にケニヤを旅した画家ジル・アイヨー（Gilles Aillaud, 1928-2005）の動物画である。アイヨーは 60-70 年代には動物園の動物たちを檻や金網、岩山やプールといった人工的な生息環境を描き、いわば環世界そのものを作品にした。またケニヤではサバンナの風景に溶け込む多種多様の動物・虫・石までも描いている。その膨大な動物画やデッサンの展覧会、書籍化の際に多くの文章を寄せ、伴走し続けたのがバイイである。以上のことから、本研究は動物と人間について思考したバイイの詩的・思想的エッセイ群と、バイイの動物論の参照源となる画家アイヨーの動物画を主な分析対象とするに至った。

3. 研究の結果

2025年8月、フランス出張を実施した。パリのフランス国立図書館にて、バイイおよびアイヨーの関連資料を調査するとともに、フランスの芸術作品における動物の扱われ方を検討するため、北西部フィニステール県ランデルノーで開催された展覧会「Animal!? Une exposition de chefs-d’œuvre （動物！？ 傑作展）」を訪れた。同展は、広義の＜動物＞つまり哺乳類だけでなく鳥類や昆虫までも含む「人間以外の生物」と人間との関係に関わる文学・芸術作品のマスターピースを集めたものである。人間以外の生物への憧憬あるいは人間中心主義の反省がどのような形で芸術に表れてきたのかを概観することができた。本研究において重視するのは、人間もまた動物であるという自己意識を喚起するような作品群である。

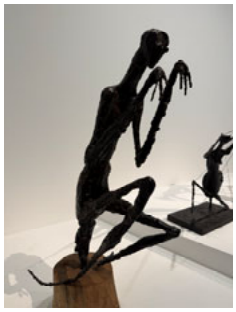




【上】アネット・メサジェ「彼らと私たち、私たちと彼ら」2000年　動物剥製、ぬいぐるみ、鏡
マリアン・グッドマン・ギャラリー蔵（筆者撮影）
【左】横から離れて見た展示　　【右】真下から見上げた時。床と筆者が鏡に映る

例えば、上の写真はアネット・メサジェ（1943-）によるインスタレーション作品「彼らと私たち、私たちと彼ら」（2000年）である。【左】のように離れて見ると、ぬいぐるみの頭部を被せられたカラフルな愛らしい鳥の剥製である。しかし私たちが下を通過しながら【右】のように見上げると、そこには鳥の亡骸を見つめる人間である自らの眼差しが映りこむ。生き物をとかく愛玩したがる私たち自身が、鳥たちから見下ろされているという立場の反転に気づかされる。

動物や鳥類だけでなく、私たち人間と＜動物＞が同等のものであるとの認識を最も鮮烈に暴いた作品には、虫の姿も認められた。ジェルメーヌ・リシエ（1902-1959）が第二次大戦中から手掛けていた彫刻作品群は、虫と人間のハイブリッド体を表現している。


【左】ジェルメーヌ・リシエ「カマキリ（大）」1946年　ブロンズ　個人蔵（筆者撮影）

上の「カマキリ」はとりわけゾッとするような存在感を放つ。長く伸びた首に頭髪のない頭蓋骨が乗り、仕草はまさにカマキリのそれでありながら、カマキリのような豊かな羽を持たない。痩せこけた背中とぶら下がる手足の様子は、むしろ極限の飢餓状態にある人間の姿を彷彿とさせる。戦中から戦後にかけて制作されたこれらの作品は、ホロコーストや原爆を経験した人類が文明の頂点から一匹の虫へと自ら転落してゆく姿を捉えている。

しかしながら、こうした動物になってゆく人間の自己認識は、動物を客体化する西欧哲学の図式に反省を促す流れの中にある。本研究で分析対象とするアイヨーの作品と比較検討した結果、アイヨーは動物を客体化せず、動物の主体性を描いている可能性が高いとわかった。1960–70年代の動物園シリーズは、人間中心主義の批判という点では、上述した作品群と通底する理念を持つ。しかしアイヨーの動物画は画面に人間を描きこむことがない。それによって、檻のなかで生きる動物たちは絵を見る私たち人間を直接に見つめてくることになる。そこで私たちが客体化され、自問を促される。こうした動物の主体性を直接的に描くという点では、メサジェの手法に連なりながらも、さらに踏み込んでいると言える。

また、1980年代以降のケニヤの野生動物シリーズにおいては、人間を見返す動物の眼差しすらも風景の中に溶け、動物や昆虫、さらには生物の末路としての石たちが、周囲の環境（樹木、土、空気、水、空など）と混ざり合う形で存在する姿を描いた点で、現代の環境主体の思想につながると考えられる。今後は、アイヨーを論じるバイイの文章を分析することによって、以上の考察を裏付ける作業を行い、両者の作品世界の特性を明らかにしていく。

4. 研究者としてのこれからの展望

研究者として、狭義の研究領域に固執しすぎることなく、広く伝わることばを持って研究成果を示していきたいと考えている。教員として教える学生たち、ひいては社会全般の方々と問題意識を共有していくためにも、自分自身が視野を広く保ち、自分たちの生きる現実と地続きにつながっていることばを使うことを心がけたい。そのためには、文献渉猟に基づく専門に特化した研究活動を進めながらも、足を使ってさまざまの現場に赴き、見聞を広め、そこにいる・いた人々の声に耳を傾けることが必要となるだろう。今後、存命の作家にはインタビューを実施する機会を探るためにも、十分な準備をしていきたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この場を借りて支援者の皆様に一番にお伝えしたいことは、新しい研究に挑戦するためには、情熱はもちろんのこと、時間と資金が必要であるということです。私自身、これまで長期間にわたって特定の作家を軸にした狭義のヨーロッパ文学の研究をしてきました。その中で重要性を増してきた「人間と動物」というテーマ系へと大きく舵を切り、現代の環境問題とも密接に関わる内容に踏み込むためには、全く専門の範囲を超えた、しかしとても興味深い自然科学や哲学思想について多くの勉強が必要でした。今もなおその勉強の途上にあり、これから研究成果を公表していく間にも続いていくことになります。しかしそれは、とてつもなくワクワクする勉強であり、研究者にとってこれほど楽しい時間はあ

りません。私自身に限って言えば、新しい魂を吹き込まれたといっても過言ではないでしょう。今回、この大きな転換のチャンスをいただいたことについて、心から謝意を申し上げます。

2年連続で「女性研究者奨励金」に採択されたことは、自分の研究テーマの方向性と可能性を模索し、射程を大きく広げることに繋がりました。実社会ともっと直接に関わるような研究をしたい、今生きている感覚と自分の研究とを繋げたいと思い続けていたにも関わらず、なかなか実現できずにいた自分の背中を押していただいたように思います。私のように出産・育児等を経て、生活や身体的な激動の変化を経験する中で、研究ブランクが生じたり、新しいテーマに挑戦したいと視点が変わる女性研究者も多くあると思います。こうしたご支援のおかげで、迷いなく一歩を踏み出し、さらに研究を発展させていく機会になるということを、皆様に知っていただけたら幸甚です。